

教職課程履修学生の読書の実態

——スマートフォン利用との関連から——

Reading Habits of Teacher Training Course Students: The Relationship with Smartphone Usage

川那部 隆司・渋谷 郁子

KAWANABE Takashi・SHIBUYA Ikuko

I 問題と背景

「若者の読書離れが進んでいる」という認識がもたれるようになって久しい。全世代を対象として文化庁が実施している「国語に関する世論調査」によると、漫画・雑誌を除く書籍（電子書籍含む）を1カ月に「1冊も読まない」と回答したのは、2008年時点で46.1%となっていた。その後、2013年、2018年の調査においても47%台であったが、2023年調査では62.6%と急速に増えている。性別や年齢を問わず、1カ月に「1冊も読まない」割合が最も高いことに加え、読む本の冊数を見ても「1、2冊」、「3、4冊」、「5、6冊」、「7冊以上」のいずれについても過去の調査より減少している。文化庁の「国語に関する世論調査」に見られるこうした結果は、大学生や大人を含む幅広い世代の読書量減少を示しており、本研究が焦点を当てる教職課程履修生にも同様の傾向が見られるかを検討する必要性を裏付けている。

読書活動がさまざまな良い影響をもたらすことは古くから言われてきたことである。平成14年に制定された「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」では、「読書活動は、子どもが、言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かなものにし、人生をより深く生きる力を身に付けていく上で欠くことができないもの」とされている。実際、読書が語彙力や文章理解力を高める効果を持つことは、理論的あるいは実証的に示されてきた（たとえば Stanovich, Nathan, & Vala-Rossi, 1986; Cain, Lemmon, & Oakhill, 2004; Cain, Oakhill, & Elbro, 2003; Senechal, 2006）。国内においても、小学生を対象とした研究において、読書量と語彙力および文章理解力と

の間に正の相関がみられている（猪原・上田・塩谷・小山内, 2015）。

こうした読書活動の促進的効果を踏まえると、教師にとっても読書活動は極めて重要な行為であろう。さらに言えば、教師自身が読書を行い、生徒の前で読書の楽しさや重要性を体現することが、生徒の読書活動を促すことにつながるとも考えられる。しかしながら、連合総合生活開発研究所が教師を対象に行った調査（2016）によると、最も読書時間が多かった高等学校の男性教師で1日当たり約32分、最も少なかった中学校の女性教師で約16分という結果になっており、多忙さもあわさって教師が極めて短い時間しか読書に取り組めていないことがうかがわれる。

年代ごとの読書量の推移をみると、小中学生においては、読書量は増加しているという調査結果が得られている。全国学校図書館協議会が毎年実施している「学校読書調査」によると、1カ月間（5月）の平均読書冊数は1993年から2023年の31年間で、小学生は月6.4冊から12.6冊に、中学生は月1.7冊から5.5冊に増えている。

一方、高校生の結果については、大きな変化はみられておらず、平均1.3冊から1.9冊へと推移している。また、全国の大学生を対象とした全国大学生生活協同組合連合会の「学生生活実態調査」によると、大学生の1日の平均読書時間30分前後で推移しており、全く読書をしない大学生（1日の平均読書時間が「0分」）は全体の45%から50%で推移している。20歳以上の成人を対象とした調査では、「近年数年間の読書量が減った」と回答した人は35.5%で、そのうちSNSの影響を挙げた人は6.2%であったのに対し、「家庭や

仕事が忙しくなったから」と答えた人は49.0%となっていた(上田, 2017)。これは、この調査が1,000名以上を対象とした大規模なものではあるものの、年齢は20歳以上で、大学生は全体のわずか2%程度となっていることも関係していると推察される。

以上の結果を総合すると、小中学生、特に小学校段階では、読書離れが生じているどころか、むしろ読書量が増えている傾向にある。そして、高校生や大学生では「読書離れ」とまでは言わないまでも、読書をしない人の割合が高くなっており、卒業後の大人において読書離れが進行していることがわかる。読書離れの一因とされている仕事や家庭の忙しさの解消について、社会的あるいは制度的な対応が求められる一方で、高校生や大学生の段階から後の人生に続く読書習慣を身に付けておくことが必要だろう。

Ⅱ 本研究の目的

本研究では、教員を志望し、教職課程を履修している学生の読書の実態を明らかにすることを目的とする。上述の通り、大学生全体としては読書離れが進行しているという明確なデータはないものの、総じて読書をしない割合が高くなっている。学校教師の読書実態と読書意識を定量的に調べた中島(2010)でも論じられているように、教師は、教師自身が学び続けるという意味でも、生徒らにとってのモデルになるという意味でも、読書習慣を身に付けておくべきだと考えられる。そこで、教職課程を履修している学生の読書の実態を明らかにしたい。

読書習慣に焦点を当てた調査は主に高校生以下を対象としているものが多く、大学生を対象とした研究のほとんどは、特定大学や特定学部の、特定学年を対象とした調査となっている。本研究もやはり小規模調査ではあるが、教職課程履修者に限定している点は特徴的であると言えよう。

本研究では、読書量や読書頻度を調べる方法として、澤崎(2020)を参考にした。澤崎(2020)で紹介されている調査もまた静岡大学国際関係学部の1年生のみを対象とした小規模調査だが、2009年度から2018年度までの結果を横断的に分

析しており、学生に実態や社会情勢に合わせて質問項目が変更されていく中でも、10年間のうち少なくとも4年にわたって回答を求めた質問を分析対象としていることから、構成概念妥当性を十分に備えたものとなっていると考えられる。

また、本研究では、大学生の読書習慣に影響を与えているものとしてスマートフォン利用を取り上げた。全国大学生生活協同組合連合会の「学生生活実態調査」を分析した浜島(2019)において、読書習慣のない学生は、読書習慣のある学生よりも、スマートフォン利用時間が一貫して長いものの、その時間の差は20～30分ほどであり、スマートフォン利用が読書を減少させたという直接的な影響は少なく、高校までの読書習慣が全体的に下がっていることや調査時点(時代)の影響が大きいと指摘している。

本研究では、調査対象が他と異なることや時代の違いを考慮して、再度この点についても検証を行う。すなわち、スマートフォンの利用時間と読書習慣との関係を明らかにする。さらに、これまでの研究においては、スマートフォンの利用に関しては、その利用時間を尋ねるのが一般的だったが、それに加えて、スマートフォンの利用が多忙感も含めて、生活の諸側面に影響しているという対象者自身の主観的な意識も尋ね、その読書への影響を調べることにした。

本研究の目的をまとめると以下の2つであった。第1の目的は、教職課程を履修している学生の読書事情を明らかにすることであった。全体として読書量は少なくなっており、高校生までの読書習慣の影響が大きいことが予想された。第2の目的は、スマートフォン利用が読書習慣にどのように影響するかを明らかにすることであった。スマートフォン利用は、近年の大学においては授業での利用を求められることも多くなっていることから、利用時間が直接的に影響することは少ないと考えられる。一方で、スマートフォンを過度に利用してしまっているという意識や依存しているのではないかという主観的な感覚は、忙しさや読書する時間のなさを感じさせる可能性がある。

表1 読書の実態を尋ねる項目

1. 本、新聞、雑誌、インターネット、スマホなど、すべて合わせて文章をどのくらい読みますか？	「ほとんど読まない」～「毎日読む」 7件法
2. 本、新聞、雑誌、インターネット、スマホで文章を読んでいる時間は、一日のうちどのくらいですか？	0.5時間単位で回答
3. 上記のうち、紙に印刷されている文章を読んでいる時間は、一日のうちどのくらいですか？インターネットやスマホでの読書は含みません。	0.5時間単位で回答 (0時間、0.5時間、1.5時間など)
4. 文字で書いてあるものを読むのは好きですか、嫌いですか？	「とても嫌い」～「とても好き」 7件法
5. 紙に書かれているものを読むのは好きですか、嫌いですか？	「とても嫌い」～「とても好き」 7件法
6. 通常、日本語の本（小説など）をどのくらい読みますか？（読む頻度）	「ほとんど読まない」～「毎日読む」 7件法
7. 通常、日本語の本（小説など）をどのくらい読みますか？（読む量）	「1年で1～2冊以下」～「1～3日で1冊」 7件法
8. 高校生の時、どの程度日本語の本を読んでいたか？（雑誌・新聞・マンガ・ネットの文章を除く）	「ほとんど読んでいなかった」～「毎日読んでいた」 7件法
9. 中学生の時、どの程度日本語の本を読んでいたか？（雑誌・新聞・マンガ・ネットの文章を除く）	「ほとんど読んでいなかった」～「毎日読んでいた」 7件法
10. 小学生の時、どの程度日本語の本を読んでいたか？（雑誌・新聞・マンガ・ネットの文章を除く）	「ほとんど読んでいなかった」～「毎日読んでいた」 7件法

Ⅲ 方法

1 研究協力者および調査時期

大規模私立A大学において教職課程を履修している大学生140名を対象とした。人文社会系学部の1回生以上配当の授業の4月下旬に調査を実施したことから、大半が1回生、18歳であった（平均年齢18.2歳、範囲18～22歳）。性別は男性64名、女性72名、無回答2名であった。

2 質問紙

(1) 読書の実態 読書の実態について尋ねるために、澤崎（2020）を参考にしつつ、文章や活字を読む頻度および一日あたりの時間、活字や文章を読むことに対する好悪、現在の読書頻度と読書量、小学校、中学校、高校における読書頻度、計10項目を尋ねた（表1）。

(2) スマートフォン利用の実態 平日および休日のスマートフォン利用時間について尋ねた。また、スマートフォン利用に関する意識を尋ねるため、スマホ依存尺度（戸田・西尾・竹下, 2015）を使用した。スマホ依存尺度（Wakayama

Smartphone Dependence Scale, 以下WSDSと記す）は、スマートフォンへの依存に対する意識を尋ねる尺度で、「ネットコミュニケーションへの没頭」、「スマホ優先と長時間利用」、「『ながらスマホ』とマナーの軽視」の3下位尺度21項目から構成されている。標準化された尺度ではないことから、分析に際しては合計得点を算出することとし、さらにスマートフォンにどの程度依存しているかというかを直接的に尋ね、5段階で評価するよう求めた。

3 手続き

調査はすべてオンラインで実施した。回答に先立って、研究の目的および得られたデータの保護について説明を行った。これらに同意が得られた回答者のデータのみを分析対象とした。

Ⅳ 結果

(1) 読書の実態

読書の実態について、項目ごとに分析を行った。まず、書籍等ではなく、文章自体を普段どの程度読んでいるかについて尋ねた項目1では、「7. 毎

表2 各時期における読書頻度 (カッコ内は百分率を表す)

選択肢	小学校	中学校	高校	大学	
1. ほとんど読んでいなかった (ほとんど読んでいない)	18 (12.9)	19 (13.6)	41 (29.3)	39 (27.9)	
2. 1と3の間くらい	8 (5.7)	14 (10.0)	15 (10.7)	7 (5.0)	
3. たまに気が向いたら読んでいた (たまに気が向いたら読んでいる)	22 (15.7)	32 (22.9)	32 (22.9)	50 (35.7)	
4. 3と5の間くらい	6 (4.3)	12 (8.6)	10 (7.1)	10 (7.1)	
5. 数日に1度読んでいた (数日に1度読んでいる)	19 (13.6)	14 (10.0)	16 (11.4)	20 (14.3)	
6. 5と7の間くらい	11 (7.9)	12 (8.6)	10 (7.1)	7 (5.0)	
7. 毎日読んでいた (毎日読んでいる)	56 (40.0)	37 (26.4)	16 (11.4)	7 (5.0)	
	平均 (SD)	4.84 (2.21)	4.23 (2.15)	3.27 (2.05)	3.10 (1.75)

日読む」の回答が73名(52.1%)と最も多くなっていた。次いで「3. たまに気が向いたら読む」が27名(19.3%)であった。

また、実際に文章を読んでいる時間を尋ねた項目2では、平均が1日あたり1.63時間(SD=1.39)となっていた。ただし、「0.5時間」と「1.0時間」を合わせて人数は69名(49.3%)で、「0時間」も6名(4.3%)いた。

項目3では、項目2のうち紙に印刷された文章を読んでいる時間を尋ねた。平均が1日あたり0.53時間(SD=0.58)となり、「0時間」の回答が48名(34.3%)であったことから、3人に1人は紙に書かれた文章を1日に少しも読んでいなかった。

続いて、活字についての好悪の実態を分析した。媒体を問わない場合(項目4)の平均値は5.0(SD=1.59)、紙に書かれている場合(項目5)は4.9(SD=1.75)であった。対応のあるt検定を行ったところ、有意な差は見られなかった($t(139)=1.599, n.s.$)。

紙の読書量(冊数、項目7)については、「1年で1~2冊以下」が最も多く、44名(31.4%)が該当した。一方、「1~2カ月で1冊」以上読んでいた人数を合計すると59名(42.1%)であった。

紙の読書頻度について、小学校、中学校、高校、大学(現在)それぞれの結果を表2に示す。これら4変数に対して相関分析を行ったところ、い

ずれも有意な正の相関がみられた(小学校-中学校 $r=.583$; 小学校-高校 $r=.267$; 小学校-大学 $r=.232$; 中学校-高校 $r=.607$; 中学校-大学 $r=.443$; 高校-大学 $r=.663$, いずれも $p<.01$)。特に、隣り合う校種間では中程度の関連がみられた。

続いて、参加者内一要因分散分析を行ったところ、主効果は有意であった($F(3, 417)=41.083, p<.001$, 偏 $\eta^2=.228$)。Bonferroni法を用いた多重比較の結果、小学校は他の3つの時期よりも読書頻度が高く、中学校は高校、大学よりも読書頻度が高くなっていた。一方、高校と大学とでは有意な違いは見られなかった。

(2) スマートフォン利用の実態

スマートフォンの利用状況として、平日、休日それぞれの利用時間を0.5時間間隔で尋ねた。平日の平均は4.46時間(SD=1.97)で、休日の平均は6.01時間(SD=2.35)であった。

スマートフォンへの依存に対する意識を表すWSDSについては、各項目の回答の「まったくあてはまらない」を1点、「あまりあてはまらない」を2点、「ややあてはまる」を3点、「あてはまる」を4点とした。得点範囲21~84点のうち、平均得点は49.0(SD=8.84)であった。また、直接的にスマートフォン利用に対する依存度を尋ねた項目(あなたはスマホに依存していると思いますか)については、「していない」を1点、「あまりして

表3 大学での読書頻度と各変数との相関係数および重回帰分析の結果

	相関係数	重回帰分析 (df=132)	
		標準化係数	t 値
読書頻度・小学校	.232**	.036	.437
読書頻度・中学校	.443**	.007	.066
読書頻度・高校	.663**	.654***	7.882
スマホ・平日利用時間	-.108	-.080	-.702
スマホ・休日利用時間	-.073	.006	.054
WSDS 得点	-.079	-.111	-1.444
スマホ依存自己評価	.004	.127	1.567

*** $p < .001$; ** $p < .01$

いない」を2点、「わからない」を3点、「ややしている」を4点、「している」を5点として得点化した。平均得点は3.7 (SD=0.93) であった。

(3) 読書とスマートフォン利用との関係

現在の（大学での）読書状況とスマートフォンの利用状況との関係を見るため、重回帰分析（強制投入法）を行った。現在（大学）の読書頻度（表1の項目6）を目的変数とし、説明変数には、小学校、中学校、高校時代の読書頻度、平日および休日のスマートフォン利用時間、WSDS 得点、スマートフォン依存度の自己評価を用いた。読書頻度を用いたのは、小学校、中学校、高校と共通の選択肢を用いているためである。結果を表3に示す。

スマートフォンの利用状況や意識に関する変数とは有意な相関がみられなかった。また、重回帰分析の結果 ($Adj R^2=.434$) から、大学での読書頻度に有意な影響を及ぼしていたのは、高校での読書頻度のみであった。

V 考察

本研究は教職課程を履修している大学生の読書の実態について、スマートフォンの利用状況および利用に対する意識との関連を調べることを目的とした。本研究は主に大学入学直後の学生を対象とした小規模調査ではあるが、教職課程履修者に限定することで、将来教師となることを志す学生の読書習慣やスマートフォン利用の実態を明らかにし、教育現場における読書指導やICT利用の在り方を考える上での基礎データを提供する点に意義があると言えよう。結果から、教職課程履修

学生の読書実態として以下の点が明らかとなった。

第1に、教職課程履修学生の読書状況として、1～2カ月で1冊以上紙の本を読んでいる学生は約4割となっていた。すなわち、少なくとも紙の本に関しては、半数以上の学生は1カ月に1冊も本を読んでいないことになる。1カ月に1冊も本を読まない人の割合は不読率と呼ばれる（澤崎, 2020）が、多くがこれに含まれると言える。

また、文章を読んでいる時間については、オンラインも含めた場合は1日あたり平均1.63時間、紙に印刷されたものに限定した場合は1日あたり平均0.53時間という結果であった。ただし、1日のうち、紙に印刷された文章を全く読まない人の割合は3割以上となっていた。

これらのことから、オンラインも含めて文章を読んでいる時間は1日1時間以上あることから、必ずしも活字離れが生じているわけではなく、紙からスマートフォン等に文章を読む媒体が変化していることが考えられる。しかし、他の先行研究で示されている結果と類似して、教職課程履修学生も1カ月に1冊も本を読まない人の割合は約6割であった。したがって、紙の本の利用が減り、スマートフォン等の利用が増えていく中で、読書離れが生じていると言える。

しかしながら、媒体を問わず、文章を読むことそれ自体を好きである割合は高かった。このことから、読書離れが文章を読むことの好き嫌いから生じているわけではないと推察される。

これらの結果は、16歳以上を対象とした文化庁による「国語に関する世論調査」や大学生全体を幅広く対象とした分析を行った浜島（2019）や

平山 (2015) などの先行研究の結果とも共通している。本研究では、教職課程履修学生に限定してはいるものの、調査実施時期が入学直後の時期であったことから、教職ということの固有性が見られなかった可能性があり、教職課程の履修を継続している上回生についての調査を行い、検討していくことが求められる。

大学においては読書離れが深刻な状況であったが、入学前までは読書習慣を身につけていた学生も多くみられた。「毎日」あるいは「数日に1度」の頻度で本を読んでいた人の割合は、小学校時点では61.5%、中学校時点でも45.0%となっていた。しかしながら、高校時点でその割合は急激に減少して3割を下回り、その傾向が大学でも続いていた。現在でも、小学校や中学校、高校において熱心な読書指導、読書教育が行われているが、その効果がどのように表れるかは不明である。本研究の結果から、大学における読書頻度は、小学校時点の読書頻度と非常に弱い正の相関が、中学校時点の読書頻度とは弱い正の相関がみられたが、直接的な影響がみられたのは、高校時点の読書頻度のみであった。読書教育の、特に持続的効果を明らかにしていくことが求められる。

さらに、中学校から高校の移行する際に、本を読まなくなるという結果から、高校において、具体的にどのような読書指導がなされているかについては丁寧な検証が必要である。たとえば、高校教員の読書教育に対する意識を調べた野口(2013)では、教科によって教員間で意識の違いが見られたことや、経験年数の少ない教員では読書教育への意識が高くても、それが具体的な指導に結び付きにくいことなどが報告されている。

また、読書とスマートフォン利用との関係については、明確な関連がみられなかった。この結果もまた、浜島 (2019) の報告と一致しており、スマートフォンの利用に関しては、利用時間だけでなく、利用しすぎていたり、依存しているかもしれないといった意識についても、読書頻度や読書量に影響していないことがわかった。

ただし、スマートフォンの利用時間や利用状況に対する意識の結果については注意が必要である。本研究の結果から、平日の利用時間は平均4.46

時間、休日では平均6.01時間と、かなり長時間利用している実態が明らかとなった。また、スマートフォンへの依存度合いを示すWSDSや依存度合いの自己評価は決して低いとは言えず、学生自身もその傾向に自覚的であった。スマートフォンの利用それ自体は直接的に読書頻度を低下させるわけではないが、過度な利用による身体的・精神的疲労や時間的な制約が間接的に影響している可能性は否定できない。一方で、読書に代わりスマートフォンの利用時間が長くなっていることに関して、スマートフォンを利用してどのような活動に従事しているか、またそこで何が獲得されているかや失われているかについて明らかにしていくことも求められる。

最後に、今後の展望を述べる。本研究は教職課程履修学生の読書事情およびそれへのスマートフォン利用の影響について試行的に調べた。今後、まずは他の学年の学生のデータを収集し、学年情報を踏まえた分析を行う必要がある。また、そもそも「読書」とはどのような行為を指すかということも含め、読書の実態を測定するための適切な指標については引き続き検討する必要がある。スマートフォンの利用に関する指標も同様だろう。それと同時に、紙の本というアナログな媒体とスマートフォン等のデジタルな媒体の違いに留意しつつ、読書という行為が教職を目指す学生にとってどのような意味を持つのかを検討していく必要がある。読書という行為に取り組んでいる時間が減少していることが、教員としての資質・能力に具体的にどのように影響しているかを明らかにし、これまで自然と培われてきていた部分が失われているのであれば、養成課程において意図的にそれを補填することが求められる。

VI 引用文献

- 文化庁国語課 (2024). 国語に関する世論調査. https://www.bunka.go.jp/koho_hodo_oshirase/hodohappyo/pdf/94111701_01.pdf (参照日 2024年9月29日)
- Cain, K., Oakhill, J., & Lemmon, K. (2005). The relation between children's reading comprehension level and their comprehension of idioms. *Journal of Experimental Child Psychology*, 90, 65-87.
- Cain, K., Oakhill, J. V., & Elbro, C. (2003). The ability to learn new word meanings from context by school-age

- children with and without language comprehension difficulties. *Journal of Child Language*, **30**, 681-694.
- 浜島幸司 (2019). 読書習慣のない大学生の特性と傾向. 武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要, **9**, 77-88.
- 平山祐一郎 (2015). 大学生の読書の変化 2006 年調査と 2012 年調査の比較より. *読書科学*, **56**, 55-64.
- 猪原敬介・上田紋佳・塩谷京子・小山内秀和 (2015). 複数の読書量推定指標と語彙力・文章理解力との関係—日本人小学校児童への横断的調査による検討—. *教育心理学研究*, **63**, 254-266.
- 中島正明 (2010). 学校教師の読書実態と読書意識に関する研究. *安田女子大学紀要*, **38**, 121-137.
- 野口久美子 (2013). 教員の読書指導への意識や実態を踏まえた学校図書館の支援のあり方: 高等学校を対象とした調査をもとに. *日本図書館情報学会誌*, **59**, 61-78.
- 連合総合生活開発研究所 (2016). とりもどせ! 教職員の「生活時間」—日本における教職員の働き方・労働時間の実態に関する研究委員会報告書— https://www.rengo-soken.or.jp/work/bcf009507f3_6983a485217ed230437e742fb5082.pdf (参照日 2024 年 9 月 29 日)
- 澤崎宏一 (2020). 大学生の読書習慣が 10 年間でどう変わったか—静岡県立大学新入生の調査 (2009-2018) より—. *国際関係・比較文化研究*, **19**, 55-79.
- 戸田雅裕・西尾信宏・竹下達也 (2015). 新しいスマートフォン依存尺度の開発. *日本衛生学雑誌*, **70**, 259-263.
- 上田修一 (2017). 大人は何を読んでいるのか: 成人の読書の範囲と内容. *日本図書館情報学会研究大会発表論文集*, **65**, 13-16.
- Sénéchal, M. & Young, L. (2006). The Effect of Family Literacy Interventions on Children's Acquisition of Reading. From Kindergarten to Grade 3. A Meta-Analytic Review. *Review of Educational Research*, **78**, 880-907.
- Stanovich, K. E., Nathan, R. G., & Vala-Rossi, M. (1986). Developmental changes in the cognitive correlates of reading ability and the developmental lag hypothesis. *Reading Research Quarterly*, **21**, 267-283.
- 全国学校図書館協議会 (2023). 学校読書調査の結果. <https://www.j-sla.or.jp/material/research/dokusyotyousa.html> (参照日 2024 年 9 月 29 日)
- 全国大学生生活協同組合連合会 (2024). 第 59 回学生生活実態調査 概要報告. <http://www.univcoop.or.jp/press/life/report.html> (参照日 2024 年 9 月 29 日)

